

# 外国人のための日本語教育教材の問題点について —日本語分析ツールを応用した教育素材の提案—

幸松英恵, 佐野洋

東京外国語大学 大学院地域文化研究科, 東京外国語大学 外国語学部

E-Mail : sano@tufs.ac.jp

## 概要

本稿は、外国人のための日本語教育教材の中の原因・理由の表現を取り上げる。典型的な表現形式には「から」「ので」「ために」などの接続形式がある。このうち、「ので」が従属節述語に現れるムード形式に制限を持つのに対し、「から」は、様々なムード形式を前接し得るという特徴をもつ。中でも説明のムードと云われる「のだ」が従属節述語中に現れる頻度は高く、もはや「から」と「のだから」でひとつの対立関係を形成していると言っても過言ではない。「のだから」は、口語表現でも頻繁に利用されるにもかかわらず、教材の中で、正確に表現説明がされていないのが現状である。そのため、外国人学習者には、「先生が来たんだから教室が静かになった」のような、「から」と「のだから」の用法の違いを理解していないことに起因する誤用が多く見られる。日本語学の先行研究においても、「のだから」の用法は最近分析されはじめてはいるが、「から」との明確な運用基準の違いは未だに明らかにされていない。

筆者は、日本語分析ツールを利用して、新聞記事1年分の文章を対象に「から」と「のだから」の用法を調べた。母語者の言語直感に頼った研究に陥ってしまわないように、大規模な用例を調査した結果、従属節と主節の叙法の関係を含めた、「から」と「のだから」の用法の違いが明らかになってきた。さらに我々は、外国人への教育目的の観点から、「から」と「のだから」の違いを説明する教育素材を作成した。この教育素材では、いわゆる言語感覚に訴えるような例文中心の用法の説明はなく、外国人も直ちに理解できるであろう一般的な思考の用語、すなわち、推論空間、関係表現、事実性の用語を使って記述的に用法を説明する。

## A Note on Japanese language education for foreigners

### Abstract

In this paper, we discuss some expressions of reason/cause in Japanese language education for foreigners. Some typical styles of expressing reason/cause are conjunctive expressions, such as "kara", "tameni", "node". Subordinate clauses consisting of "node" have limited mood in them. On the other hand, subordinate clauses consisting of "kara" can contain various moods. However, "kara" tends to appear with a persuasive mood, "noda". "Nodakara" is often used in spoken Japanese. We argue that "kara" and "nodakara" have contrastive structural relations.

On the contrary, an accurate account for the difference cannot be found in Japanese language materials. As a result, Japanese learners fail to distinguish two expressions, "kara" and "nodakara". The following is an example of how some students misuse the expression, "nodakara": "Senseiga kitandakara kyousituga sizukaninatta." We couldn't find a clear standard for usage of "nodakara" and "kara" in earlier studies.

We used a Japanese language analysis tool to search the usages of "nodakara" and "kara", using newspaper articles collected over the period of one year. This method doesn't depend on native Japanese language speakers' subjectivity. As a result of this study, the following trends emerged. "Nodakara" and "kara" have different kinds of mood in subordinate clauses and different tendencies to match with certain predicates in subordinate clauses.

Moreover, we have developed Japanese language materials for foreigners. The main features of this material are: (1) it doesn't use an example-based approach. In other words, this is a methodology that doesn't rely on extensive language experience. (2) Usages are accounted for descriptively with more general terms such as inference space, causal relation or inference chain. Japanese learners easily understand this account.

## 1. はじめに

言語には、伝達機能だけでなく、思考の道具としての機能がある。我々は、ことばによって思考をしている。自らが言いたい事柄を思考によって明確に認識し、考えをまとめ、そして表現する。一方で、相手が言った事柄や記述されている事柄の中にある考えを整理し、その内容を理解する。こうした行為は、ことばの基本的な運用能力である。思考力なしにことばをうまく機能させることはできない。

思考とは何であるかを探求することは極めて困難な事柄である。思考への直接的な接近は難しいものの、思考の断片をことばの表現に求めて、その特徴を調べることは可能なアプローチである。

本稿では、外国人のための日本語教育教材における原因・理由の表現を取り上げる。典型的な表現形式には「から」「ために」「ので」などの接続表現がある。このうち、「ので」が従属節に含むムード形式に制限を持つのにに対し、「から」の場合、様々なムード形式を前接し得る。中でも説明のムードと云われる「のだ」が従属節述語中に現れる頻度は圧倒的に高く、もはや「のだから」が「から」とは異なる原因・理由の表現として、ひとつの表現形式を形成していると言っても過言ではない。

また、「のだから」は、口語表現でも「んだから」という音便形となって頻繁に利用される。にもかかわらず、教材の中で、正確に表現説明がされていないのが現状である。そのため、外国人学習者には、「先生が来たんだから教室が静かになった」のような、「から」と「のだから」に関する誤用が多く見られる。日本語学における先行研究でも「のだから」の用法は分析されてはいるが、「から」との明確な運用基準の違いが明らかにされていない。教材素材を作成するための先行する研究成果もあまり見られないのである。

筆者等は、「のだ」と「のだから」の分布に着目して、日本語教育のための教材を開発することにした。日本語を研究しているとはいえ、その、読書範囲、あるいは母語者の内省によって得られる例文には偏りがあることも否めない。そこで、コンピュータを使った日本語分析ツールを利用して、新聞記事1年分の日本語文章を対象に「から」と「のだから」の用法を調べた。母語者の言語直感に頼らない方法で、大規模な用例を調査した結果、従属節と主節の叙法の関係を含めた、「から」と「のだから」の使い方の違いが明らかになった。さらに我々は、外国人への教育目的の観点から、「から」と「のだから」の違いを説明する教育素材を作成した。この教育素材では、いわゆる言語感覚に訴えるような例文中心の用法の説明ではなく、外国人も直ちに理解できるであろう一般的な思考の用語、すなわち、推論空間、関係性、推論連鎖の用語を使って記述的に用法を説明する。

本章に続いて、第2章では、原因・理由の表現を概観し、構文特徴だけではなく、思考側面から原因・理由の表現形式を再考する。第3章は、話し手の判断が、原因・理由を述べるときに重要な働きを示す。「から」「のだから」に関する先行研究を示し、問題点を指摘する。第4章は、大規模なコーパスと日本語分析ツールを用いた「から」「のだから」の分析結果を示し、原因・理由の表現特徴を挙げて、その分析結果の解釈を示す。その結果から、外国人のための日本語教育のための教材を提案する。第5章で本稿をまとめる。

## 2. 原因・理由の表現と推論

### 2.1 原因・理由を表す接続形式

日本語には、原因・理由を表す従属節を形成する接続形式として、「ので」「から」「ために」などの表現がある。この中の、「ので」と「から」、そして本稿が焦点をあてる「のだから」の文型と用法を挙げる[88頁,467頁,469頁,4](表1を参照)。

表1 「ので」「から」「のだから」の用法

| 表現                     | 用法                                                                                     |
|------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| ので                     | 前の節で述べていることが原因や理由となって後ろの節で述べるということが起こるということを表す。前の事柄と後ろの事柄の因果関係が客観的に認められるものである場合に用いられる。 |
| 文型                     |                                                                                        |
| N/AV なので<br>A/V ので     |                                                                                        |
| 表現                     | 用法                                                                                     |
| から                     | 普通体にも丁寧体にも接続する。話し手が主体的な立場で行う依頼・命令・推量・意思・主張などの理由を述べる時に使う。「ので」と比べて主観性が強い。                |
| 文型                     |                                                                                        |
| N/AV だから<br>A/V から     |                                                                                        |
| 表現                     | 用法                                                                                     |
| のだから                   | 節を受けて、そこで述べられていることが事実であると認め、その事実が原因・理由となって次に述べることがらが導き出されることを表す。                       |
| 文型                     |                                                                                        |
| N/AV なのだから<br>A/V のだから |                                                                                        |

一方、英語では、because, since, as, for, due to, owing to, therefore, consequently, as a result などの表現がある。

[472頁,5]では、because, as, since を理由と因果関係を表す節として説明し、主観的な判断の必要な理由と、客観的な事実関係からなる因果関係を区別して since と because の使い分けを説明している。それによると、状況に依存する(一時的な)事実関係をもとにした原因・理由の表現は、as, since を使い、because による言い換えはできないという。as は、

いずれの場合も使えるという(表 2を参照)。簡略的に言えば, because は「ので」に対応し, 「から」は, as, since に対応すると言えるかもしれない。

表 2 because, since の用法

| 表現                        | 用法                                         |
|---------------------------|--------------------------------------------|
| because                   | 客観的な事実関係に基づく因果関係の原因を表す。理由を示す表現には妥当性が必要である。 |
| 文型                        |                                            |
| because 節<br>because of N |                                            |
| 表現                        | 用法                                         |
| since                     | 理由を示すが, 結果との間に直接的な因果関係が認められない場合にも使える。      |
| 文型                        |                                            |
| since 節                   |                                            |

## 2.2 推論連鎖と推論空間

### 2.2.1 因果関係

因果関係は, 論証に用いられ, 作文などの文章展開手段として重要であるばかりでなく, 口語表現の演習でも欠かせない。日本語作文の指導書[50~51頁,1]は, 序章の書き方の中で, 「分野の現状の到達点」「結論と目的」という 2 つの展開型を挙げ, その文章構成の中で, 前者は, 事実提示に対する原因の記述を行うよう, 後者は, 事実提示に対する結果の記述を行うよう指示している。

推論方法には, 2 つの種類がある。すなわち演繹推論(deduction)と帰納推論(induction)である。呼応する文章表現は, 演繹推論の場合には, 原因を示し, 適切な前向き連鎖表現の下に結果を示す。帰納推論の場合には, 結果を示し, 適切な後ろ向き連鎖表現の下に原因を示す。適切な連鎖表現は, 接続語や副詞を使い, 文連鎖で示すこともあるし, 従属節と主節を接続表現で結んで示すこともある。

### 2.2.2 推論空間と判断

原因・理由の表現の叙述には, 推論空間の設定が必要で, その推論空間の中で, 因果(原因と結果 cause and effect)の関係表現が存在している。因果とは, 事象間の関係性であるし, この関係性の連鎖が推論連鎖である。

事象と事象間の関係性が存在している空間を推論空間と呼ぼう。事象間の因果関係の存在には, 事象の事実性が必要である。つまり, 成立し得ない事象間には, 因果関係は成立しない。そのため, 各事象は事実でなければならない。

事実性の高い事象から構成される空間は, 一般常識空間である。個人の判断に関係なく事象の事実性が認められている。いわゆる常識推論が適用される空間である。これは「客観的な事実に基づく」推論であるか, 話し手が無判断で事象の事実性を認める推論である。

一方, 屁理屈(a far-fetched argument)ということばが存在するように, 一時的な共有空間, あるいは談話空間も推論空間たり得る。各事象の事実性は, 一般的に認められていないから, 話し手の判断に基づいて, 事象の事実性が支持されることになる。つまり, 「主観的な事実に基づいて」推論が行われる。一時的な共有空間の中では, 話し手が判断をすることで事象に事実性を一時的に与えることができる。

## 2.3 叙述状況判断と「のだ」文

### 2.3.1 推論における説明の役割

因果関係を表現する際には, 少なくとも, 事象の存在と事象間の関係性を表現しなければならない。そして, 各事象の事実性が話し手に取り上げられ, 無判断で事実性が認められる場合と, 話し手の判断のもとに事実性が認められる場合がある。前者は, 一般常識空間での推論で, 客観的な論理関係で推論が連鎖する。後者は, 一時的な共有空間での推論で, 主観的な論理関係で推論が連鎖する。

事象間の関係性は共通であるから, 問題の本質は, 事象の事実性の認定に行き着く。事象の事実性は, 話し手の説明, あるいは主張が妥当なものか否かに依存する。

### 2.3.2 説明表現のための「のだ」文

話し手の判断は, 関係性の表現と同様に, 言語上マークされる。これには説明の表現や主張の表現が相当する。日本語には, 意見文や論説文などの文章に頻出する表現として「のだ」文<sup>1</sup>がある。「のだ」は, 一般的に「説明のムード」<sup>2</sup>と呼ばれているように, それ以前に描かれている事柄を事実化し, それを説明したり, 主張を妥当化したりする機能がある。

関係表現「から」の場合, 一時的な共有空間での推論を考えると, 叙述表現する事象に事実性を与えなければ「のだ」を利用することになる。つまり「のだから」という表現は, 話し手が, 従属節内で一度判断を下すことで意見文(あるいは主張文)を展開し, 一時的に事実性を叙述事象に認めようと意図したものである。その事実に基づいて推論が行われ, 関係表現「から」で結ばれた帰結部分が, 主節で表現されることになる。

## 3. 原因・理由の表現と解釈

<sup>1</sup> 文末に「のだ」が現れる文。

<sup>2</sup> ムード(mood). 法, 叙法. 話し手の立場から定められる, 文のことがらの内容と, 場面(現実および聞き手)との関わり合い(関係~関連づけ)についての文法的な表現であるモダリティ(modality)を担う述語の形態を指す。

### 3.1 事実性の表現

#### 3.1.1 「から」と「のだから」

2.2 節、2.3 節の議論から、原因や理由を表現する際には、表現事象の事実性の正当化がポイントになることが分かった。そして、事象の事実性を説明するムード形式が「のだ」であることも示した。これまでの思考実験の結果、原因・理由の表現では、「から」と「のだから」は、話し手が事実性を判断する必要があるか否かで対立した表現形式を形成していると考えられる。

客観的な事象からなる因果関係を述べようとするとき、話し手は、無判断で関係表現「から」を使うことができる。主観的な判断を下した上で理由や原因を述べようとするとき、話し手は、「のだ」を媒介として、関係表現「から」を用いることになる。日本語母語者は、原因・理由の表現をしようとするとき、事象の事実性に基づいて「から」と「のだから」を使い分けているのである。

原因・理由の関係性の表現や、事象の事実性とその表現に関する事柄は、日本語固有なものではない。それ自身一般化した事柄であるので、記述説明が容易で、明示的に教えることができれば、日本語を外国語として学ぶ学習者にとっても理解しやすい筈である<sup>3</sup>。

#### 3.1.2 「のだ」文の教授

筆者の幸松が経験した日本語教育の現場では、文法の授業で学生に教えるべき文法項目の一つとして、独立した形で「のだ」を取り上げてはいなかった。意見文などの作文指導を行う際も、学習者に対して「のだ」文の機能について理解させ、その使用を促すような指導は一切行っていなかった。つまり、「のだ」文の習得に関しては、全く学生の自然習得に任されているのが現状であった。

もちろん、教室の教授活動の中で教師の発話の中には「のだ」が頻繁に現れる。しかし、口語表現では「の」は、音便形「ん」として会話の中に紛れ込んでしまうので、聴き取りにくく、自覚的にインプット(input)され難いという問題がある。仮に学習者が、「の」を自覚しても、会話で多用される「ん」と、文章中の「の(だ)」文の機能が同一のものと理解しない学生もいる。

最も大きな障害は、会話中や文章中で学習者による「のだ」の誤用が現れても、教師がそれを指摘しない場合が多いのではないかという点にある。その理由として、(1) 使用するのが適切な場面で「のだ」を使用できなくても、意志の疎通が図れてしまうということ、(2) 形の問題ではないので、指摘した後の説明が非常に難しいことが挙げられる。「のだ」は、助詞の誤用や動詞の自他の誤用に比べて、

negative evidence を得るのが難しいと考えられる項目の一つである。

### 3.2 先行研究

本節では、2つの先行研究[2],[3]を概説する。なお、以下、本稿では、説明の簡便化のため、前件(antecedent)をPで示し、後件(consequent)をQで表すこととする。また、例文を示す際に、文頭や句頭の\*マークは、不適切な用法であることを示す。文頭や句頭の?マークは、不適切な用法である可能性があることを示す。

#### 3.2.1 先行研究 1

田野村[2]では、「のだから」の構文上の性質を「のだから」=「のだ」+「から」とみる。従って、「のだ」を加えることのできない表現には、「のだから」が付くこともない、と述べている[101 頁,2]。

例文を以下に挙げる。

- (1) あっ、雨が{降り始めた/?降り始めたんだ}よ。  
あっ、雨が{降り始めたから/?降り始めたんだから}急ごう。

逆に、「のだ」が必要とされる表現の場合には、「から」ではなく「のだから」によらなければならない。

- (2) 人間は生きるために生まれて{?くる／くるんだ}よ  
(3) 人間は生きるために生まれて{?くるから／くるんだから}、自殺してはいけない。

さらに、田野村では、「P のだから Q」という表現は、「P のだ. だから Q」という表現に比べて意味する領域が狭く、必ず、「「P である以上、当然、Q」といった意味を表すと言ってよい」と述べている。しかし、「残念ながら、「のだから」がこのような意味を表す理由は不明である」とも述べている。[103 頁,2]

また、前件、後件の制限としては、P は聞き手に関わっていることがらであり、しかも、聞き手がすでに知っているはずのことがらである、としている。[104 頁,2]

- (4) {?女性だから／女性なんだから}女性にしかできないおしゃれを楽しみましょう。  
(5) あなたなりに{?努力したから／努力したんだから}、そう言えば?  
(6) わたしもしたくが{できましたから／?できたんですから}、行きましょうか。  
(7) あすは早朝会議が{あるから／?あるんだから}、早めに来てくれ。

Q について言えば、単に知識を表明したり報告したりするものではないことが多い、と述べている。[107 頁,2]

- (8) ?忙しかったんだから、連絡が取れませんでした。

<sup>3</sup> 同様に、英語を外国語として学ぶ場合にも適用できる。

- (9) 旅行はいかがでした？ー？急用ができたんだから、旅行には行きませんでした。

### 3.2.2 先行研究 2

野田[3]も、田野村と同様に、「のだから」の構文上の性質を「のだから」＝「のだ」＋「から」とみる。[176 頁,3]しかし、「のだから」は、「…のだ。だから、…」という表現とは違う性質を持つという。

- (10) 昨日は熱があったんです。だから、一日中寝ていました。  
(11) \*昨日は熱があったんですから、一日中寝ていました。

前件 P、後件 Q の制限に関しても、ほぼ田野村と同様のことを述べている。すなわち、P の事態は聞き手が知っていることに限られ[178 頁,3],

- (12) \*雨が降ってるんだから、中止にしようよ。  
(聞き手が全く知らない場合)  
(13) 「僕、今度の学会に行くことにしたよ」  
「さっきの話だけど、君が行くのだから、R も行くだろうね」

Q に関しては、単なる事実の述べ立ては不自然であり、判断や命令・依頼、意志などに限られる[176 頁,3], と述べている。

- (14) 雨が降ったんだから、自転車が濡れている。  
(15) こんなに雨が降ったんだから、{もう降らないだろう／中止にして下さい／中止にしよう}

## 3.3 先行研究の問題点

### 3.3.1 連文と複文の間に

先行研究の両説明とも、「…のだ。だから、…」と「…のだから…」とは違う性質を持つ、ということを描するのみで、なぜ、連文と複文の間に、このような意味の差が出るのか、その理由を明らかにしていない。明らかにすることが出来ないばかりか、野田の作例には、事実誤認がある。

野田では、以下の用例で、(17)は正しい文であるのに対し、(18)は誤用であるとしている。

- (16) 昨日は熱があったんです。だから、一日中寝ていました。  
(17) \*昨日は熱があったんですから、一日中寝ていました。

しかし、(17)の例は、直感的に、どこか幼い言い回しであるような印象を受ける。その直感が正しいか否かを調べるため、「…のだ。だから、…」の実例を当たってみたところ、「だから…」の文に、(17)のような「単なる事実ののべたて」が来ることはほとんどないことがわかった。つまり、連文にしたところで、「単なる事実ののべたて」(後文)と「その理由」(前文)を表現する際、前文に「のだ」は用いられにくいということになる。

- (18) 「だから、スタンドでぼくらは単に見てるだけじゃない。感覚的にゲームに参加してるんです。だから野球は面白いんでしょう」  
(19) 「ええそうよ。この音波を発信している限り、連中は私たちからおおよそ十五メートル以内には近づけないの。だからあなたも私から十五メートル以上離れないようにしてね。」  
(20) 「貴女の手からうつったのですよ。その手に黴菌がついていたのです。だから手はいつも綺麗にしておくように言ったでしょう」

野田が挙げた例が適切ではないことを指摘した上でなお、なぜ連文と複文の間に意味の差が出るのかという問題は、依然として残っている。なぜなら、上の実例を「のだから」の形に変えることは、やはり出来ないからである。

### 3.3.2 「のだから」の性質

田野村では、「P のだから Q」は、「P である以上、当然、Q」といった意味を表すと言えるが、なぜ「のだから」がこのような意味を表す理由は不明である、と述べている。一方、野田では、「のだから」に関して、同様の性質を描した上で、これは、「従属節の事態を十分認識させた(認識した)うえで、それを根拠とした判断を主節で述べるところから生じるものである」と理由らしきものを述べている。

しかし、なぜ、「のだから」を使うことが「従属節の事態を十分認識させ」ることになるのか、それが説明できなければ、理由を述べたことにはならない。そして、その理由は遂に説明されることはない。野田は次の例を挙げ[181 頁,3],

- (21) 「会おうよ。」  
「えっ」  
「会うんだよ。今日これから」  
(辻仁成『ピアノシモ』131 頁)  
(22) 「純子、会社を辞めなさい」  
「ええ？」  
今度は純子が驚く番だ。「何よ、出しぬけに」  
「すぐに辞めるんだ！」  
(赤川次郎『女社長に乾杯！』48 頁)

「上記の例文では、話し手は、聞き手が事態を十分認識していないとみなし、事態を十分認識させようとしており、その点で「のだから」と共通している」と述べている。つまり、「のだから」の性質は、文末の「のだ」とかけはなれたものではない、というわけである。

田野村にしても野田にしても、「のだから」が持つ性質を説明しようとする際に、文末の「のだ」にも、聞き手に認識を迫る用法があることを指摘しており、その連続性から説明を試みようとしているが、一方で、それならばなぜ、「のだから」と「のだ。だから」に意味の差が出るのかは説明していない。

### 3.4 解釈モデル

ここで、筆者等の解釈モデルを示す。客観的な事象からなる因果関係を述べようとするとき、話し手は、無判断で関係表現「から」を使うのに対し、主観的に判断を下した上で理由や原因を述べようとするとき、話し手は、「のだ」を媒介として、関係表現「から」を用いることは3.1節で既に述べた。

ここで、さらに仔細に考察すると、「から」の場合、前件 P には、単に現象を描写しているような動的な事態でも、時間軸から開放された、静的な事態でも、どのような事態でも叙述し得る。一方、「のだから」は、前件 P が動的な事態であったとしても、「のだ」を形成している準体助詞「の」の働きによって、その事態を静的な事態としてまとめあげ、そのコトガラ<sup>4</sup>に対して断定する、つまり判断を下している形式と言える。

典型的には動作動詞などで表される、時間軸に配置された行為性の強い出来事から、時間性や行為性を除き、一つの静的なコトガラとして叙述しなおすことで、そのコトガラが既定のことであるという認識空間を一時的に作り上げているのだろう。当然、静的な事態に対しても、「のだから」を用いることもあるが、「のだから」は、自身の認識空間の中では、その事態がひとつのコトガラとして説明の対象になっているということを積極的にマークしている形式であるので、静的な事態に対しても、重ねてマークされることも有り得るのである。

(23) 雨が降ったから、地面がぬかるんでいる。

(23)は「雨が降った」という単なる現象を描写した上で、その結果として、地面がぬかるんでいるという事実を述べている。

(24) 雨が降ったのだから、地面がぬかるんでいる  
でも仕方がない。

「雨が降った」という動的な現象を述べているというよりも、「雨が降ったというコト」があることを述べ、そういった事実があるからには、「地面がぬかるんでいるでも仕方がない」という話し手の判断が当然であるという認識の仕方を伝えている。

### 3.5 先行研究への反例

前節で述べたように、「のだから」の性質は、準体助詞「の」の働きである、「コトガラ化」による事態の認識の仕方に特徴があると考えられる。先行研究では、両者とも、「P のだから Q」の P は、「聞き手に関わっていることがら」を表す、という見解で一致していた。しかし、名詞文や形容詞文のように、それ自体が超時間的な事態であり、なおかつ判断性を含むものは、わざわざ「の」でマークして、静的なコトガラとしてまとめ上げる必要がない。そのため、「聞き手に関わっていることがら」であったとし

ても、「のだから」にならない場合が多い、という事実を指摘することができる。名詞文や形容詞文が前件 P に来る場合、「のだから」でも「から」でもどちらでも表現し得る、互換性が高いものが多いのである。

聞き手に関わっていることがらでありながら、「から」を使っている例を挙げる。

(25) あなたは獣医ですから、科学者として教育され、進化論も学んだでしょう。

(26) 「兵隊と一緒にだと危ない。君たちは兵隊ではないから、米軍の捕虜になりなさい。

(27) 「お前の人生だから悔いがないように生きる」と言い残して父は部屋を出て行った。

常識や自明の事実を述べていて、聞き手も知っているはずなのに「から」を使っている例を挙げる。

(28) 神様ではないですから、こういうことをやったらこういうことが起きるといことは、なかなか予想できません。

(29) 人間だから、どんな相手でも好きとは限らない。

(30) 日本は議院内閣制だから、一時的に国会が指名していない人が代理を務めることになるが、これは仕方ない。

(31) 頭はいつもツルツルだから、お坊さんの年齢は外見だけではよくわからない。

聞き手に関わることではないのに「のだから」を使っている例を挙げる。

先行研究では、前件 P には、必ず「聞き手に関わることがら」「聞き手がすでに知っているはずのことから」が示されるとする。しかし、聞き手が知る由もない内面のことや個人的なこと、予想が来ることも示されるという事実が指摘できる。

(32) ゆっくりの私が「あの上り坂」をあれほどしんどいと思ったのだから、2時間36分の山口衛里さんは、さぞや大きな坂に感じられたに違いない。

(33) 話がうますぎると思っていました。うっかりしていたのだから、仕方ありません。

(34) 競泳リレー種目で決勝に進めなかったとき、アンカーの千葉すずは「精一杯やったのだから、ほめてほしい」と言った。

(35) いずれはバレるのだから、隠さないで正直に発表すべきだ。国民の信用をなくすだけ。(一橋(3)男)

このように、実際の用例を調べた結果、先行研究の説明が、必ずしも正確ではないことが明らかとなった。

## 4. 教育素材の作成

<sup>4</sup> 事柄の示す事態表現から時間にかかわることを取り去った事態表現を区別するためにコトガラと呼ぶ。

## 4.1 用例の抽出

### 4.1.1 日本語分析ツールを用いた用例の抽出

思考実験では明らかにならないことも多い。母語者の言語直感だけに頼るのではなく、大規模なことばの実運用の様を調査して、ことばの実態を見ることが大切である。

著者は、毎日新聞 2000 年版 CD-ROM を使い、その 1 年分の新聞記事の中から「…から…」が文中で仕様されている事例 4761 文を抽出した。抽出には、著者の佐野が開発した日本語分析ツールを用いた。高度な検索機能と整形機能を利用することで、従来は、手作業の介入することの多い、用例抽出作業を効率的に行うことができる。

### 4.1.2 用例の分析

抽出した全用例について、それぞれ前件と後件のモダリティを調べ、その分類を実施した。表 3、表 4 に分類結果を示す。いずれも「から」の用例中に占める「のだから」の用例と、それ以外の用例とを比較している。

次の手続きに従って、用例数を分析した。

1. 「から」、「のだから」を分け、前件、後件それぞれについてモダリティ別に用例数を数え上げた。
2. それぞれの母集団を分母として、「のだから」の用例数を分子として、比率を計算した。
3. 「から」における割合を「1」とした時に、「のだから」の割合が何倍になるのかを算出した。

例えば、後件の表において、「するだろう」の場合、「から」の用例数が 389 例で、「のだから」の用例は 99 例である。従って、 $(99 \div 904) \div (389 \div 3857) = 1.085$  となる。この計算から、「…から…だろう」に対して、「…のだから…だろう」は、1.085 倍の割合で現れていることがわかる。

表 3 前件モダリティの分類表

| 品詞   | 形式  | から   | のだから | 割合   |
|------|-----|------|------|------|
| 名詞   | 現在形 | 1075 | 132  | 0.52 |
|      | 過去形 | 97   | 19   | 0.83 |
|      | 否定形 | 22   | 6    | 1.16 |
| 形容詞  | 現在形 | 317  | 32   | 0.43 |
|      | 過去形 | 88   | 1    | 0.04 |
|      | 否定形 | 11   | 2    | 0.17 |
| 動詞   | 現在形 | 1030 | 397  | 1.64 |
|      | 過去形 | 472  | 202  | 1.82 |
|      | 否定形 | 282  | 91   | 1.37 |
| 叙法形式 |     | 463  | 22   | 0.2  |
| 合計   |     | 3857 | 904  |      |

表 4 後件モダリティの分類表

|         | 形式         | から   | のだから | 割合    | +/- |
|---------|------------|------|------|-------|-----|
| 当然      | す(ル)べきだ    | 34   | 54   | 6.776 | +   |
| 希求      | してほしい等     | 32   | 29   | 3.866 | +   |
| 許容      | してもいい等     | 12   | 10   | 3.555 | +   |
| 適切      | すればいい等     | 23   | 19   | 3.524 | +   |
| 程度      | しくてならない等   | 3    | 2    | 2.847 | +   |
| 道理      | するものだ・すること | 13   | 8    | 2.625 | +   |
| 必要      | しなければならない  | 71   | 40   | 2.403 | +   |
| 疑問      | か          | 50   | 18   | 1.536 | +   |
| 不必要     | しなくてもいい    | 3    | 1    | 1.423 | +   |
| 不可避     | せざるをえない等   | 30   | 10   | 1.422 | +   |
| 願望      | したい等       | 123  | 39   | 1.352 | +   |
| 意志      | う、よう       | 16   | 5    | 1.333 | +   |
| 推論      | はずだ等       | 75   | 23   | 1.308 | +   |
| 命令      | 命令形        | 62   | 19   | 1.307 | +   |
| 評価      | にすぎない等     | 20   | 6    | 1.28  | +   |
| 推量      | するだろう等     | 389  | 99   | 1.085 | +   |
| 依頼      | てください等     | 78   | 19   | 1.039 | +   |
| 解説      | わけだ        | 52   | 11   | 0.902 | -   |
| 意図      | するつもりだ等    | 22   | 4    | 0.776 | -   |
| 企図      | してみる等      | 18   | 3    | 0.711 | -   |
| 確信度     | かもしれない等    | 105  | 17   | 0.69  | -   |
| 適当      | した方がいい等    | 35   | 5    | 0.61  | -   |
| 不適切     | するといけない等   | 7    | 1    | 0.61  | -   |
| 説明      | のだ         | 270  | 38   | 0.6   | -   |
| 様態      | ようだ・みたいだ   | 22   | 3    | 0.582 | -   |
| 傾向      | しがちだ等      | 22   | 3    | 0.581 | -   |
| 不許容     | してはならない等   | 8    | 1    | 0.533 | -   |
| 可能      | することができる等  | 145  | 17   | 0.5   | -   |
| 不本意     | してしまう      | 40   | 4    | 0.426 | -   |
| 伝聞      | そうだ等       | 21   | 2    | 0.409 | -   |
| 推定      | らしい等       | 17   | 0    | E     | -   |
| 兆候      | しそうだ       | 12   | 0    | E     | -   |
| 形容詞いいきり |            | 382  | 136  | 1.519 | +   |
| 名詞いいきり  |            | 304  | 86   | 1.207 | +   |
| 動詞いいきり  |            | 1341 | 172  | 0.547 | -   |
| 合計      |            | 3857 | 904  |       |     |

## 4.2 教育素材の構成

前節で示した調査結果をもとに、原因・理由の日本語表現のための教育教材を提案する。

表 3は、動詞、名詞、形容詞と「から」「のだから」の接続の在りようである。「から」に比べ「のだから」は、前件に名詞文、形容詞文が来る割合が低く、動詞文が来る割合が高い。動詞文の中でも、否定形より現在形、現在形より過去形、と、より単純な現象描写である可能性が高い文ほど、「のだから」が接続する割合が高い。従って、「から」との違いを理解させるには、名詞文、形容詞文に「のだから」が後置する例文は挙げるべきではない。

表 4は主節のモダリティと「から」「のだから」の使用頻度分布である。「から」に比べ「のだから」は、後件に「すべきだ」という「当然」の叙法形式が来る割合が最も高く、希求、許容、適切、程度、道理、必要…と続く。このように、自身の判断を述べる叙法を用いる割合が高い。逆に、「伝聞」「推定」「兆候」などの叙法は、ほとんど現れないか、一例もない。これは「のだから」の性質上、自分自身の判断で前件の叙述事態の事実性を高くしてある以上、後件で、「伝聞」を示したり、客観的な「推定」を表出したりすることは不自然なためである。

叙法形式がつかない、いいきりの形としては、形容詞文が最も割合が高く、名詞文がこれに次ぎ、動詞文が最も低い割合を示した。これも、形容詞文、名詞文がより判断文的であり、動詞文が現象描写的な文である可能性が高いことを考えると、我々の思考実験を支持する結果となった。

以上の結果を踏まえ、「から」と「のだから」の違いを効率的に理解させるための教材素材の典型用例は、次の点に留意する必要がある。

1. 前件は、名詞文、形容詞文の例を使わず、動詞文の例を使った方が、「から」と「のだから」の違いを理解しやすい。
2. 後件は、「から」の例文として動詞文を、「のだから」の例文として判断性の強い叙法形式や形容詞文、名詞文の例を使った方が違いを理解しやすい。

(36) 大人だからそれくらいわかるでしょう。

(37) 大人なんだからそれくらいわかるでしょう。

(38) 忙しいから後にしてくれ。

(39) 忙しいんだから後にしてくれ。

(40) 晴れたから、運動会を開催した。

(41) 晴れたんだから、外に遊びに行くべきだった。

(42) 今日は疲れたから、プールに行かなかった。

(43) 疲れたんだから、休んでも仕方がない。

(36)(37)は前件が名詞文、(38)(40)は前件が形容詞文である。相互に言い換えることがある程度可能であり、このような例を示しても、学習者は混乱する

ばかりである。それに対して、(40)の例を、「晴れたんだから、運動会を開催した」と言い換えることは不可能である。(42)の例を「疲れたんだから、プールに行かなかった」と言い換えることもできない。このような例を学習用例として示すべきである。

上記の留意点を考慮した例文を、原因・理由の解釈モデルと併用して教授するべきであろう。なお、解釈モデルは、初学者に対しては説明せず、中級者以上に対し、説明に使うべきである。なお、母語との表現上の対照を意識させることも重要である。

## 5. おわりに

### 5.1 まとめ

本稿は、外国人のための日本語教育教材の中の原因・理由の表現「から」を取り上げた。「から」は様々なムード形式を前接し、中でも説明のムードと云われる「のだ」が従属節述語中に現れる頻度は高い。「から」と「のだから」が、原因・理由の代表的な表現として、対立関係を形成していることを、推論表現の分析による思考実験と、新聞記事1年分を対象とした実用例の抽出結果から示した。

一方、「のだから」は、口語表現で頻繁に利用されるにもかかわらず、教材の中で、正確に表現説明がされていない。そのため、外国人学習者には「から」と「のだから」に関する誤用が多く見られる。

筆者は、日本語分析ツールを利用して、大規模な用例を調査した結果、従属節と主節の叙法の関係を含めた、「から」と「のだから」の使い方の違いを明らかにした。さらに、外国人への教育目的の観点から、「から」と「のだから」の違いを説明する教育素材を作成した。

### 5.2 今後の課題

本稿では、原因・理由の表現について分析した。いわゆる「のだ」文は日本語に広く分布している。論理思考を伴う他の表現、すなわち順接、譲歩、仮定、条件などについても、思考実験による仮説と実用例の抽出を併用し、分析を進める予定である。

#### 謝辞

本研究は、文部科学省・研究費助成金・基盤研究B(2)：課題番号 14380174 による研究「全電子化検定済み教科書データの解析と大規模日本語コーパスの構築」の援助を受けている。

#### 参考文献

- [1] 君島浩, 2000, 『日本語作文作法』, 日科技連.
- [2] 田野村忠温, 1990, 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』, 和泉書院
- [3] 野田春美, 1997, 『「のだ」の機能』, くろしお出版
- [4] グループ・ジャマシイ編著, 1999, 『日本語文型辞典』, くろしお出版.
- [5] AJ トムソン, AV マーティネット, 江川泰一郎訳注, 2000, 『実例英文法』, 研究社.